

日蓮大聖人御書全集

にじょうさぶつじ

二乗作仏事

新版
654
S
661

二乗作仏事

ぶんえいこうき

文永後期

にぜんとくどう

むね

もん

きよう

い

もろもろ

ぼさつ

み

爾前得道の旨たる文。経に云わく「諸の菩薩を見る」

とううんぬん

い

しけんがしん

はじ

わ

み

み

とう

等云々。また云わく「始見我身（始め我が身を見る）」等。

もん

ぼさつ

しよじ

しよじゆう

かな

あ

これらの文のごときは、菩薩、初地・初住に叶うこと有る

み

ゆえ

もろもろ

ぼさつ

み

もん

しも

と見えたるなり。故に、「諸の菩薩を見る」の文の下には

われ

じ

あず

しけん

もん

「しかも我らはこの事に預からず」と。また「始見」の文の

しも

さき

しゆじゆう

のぞ

とううんぬん

にぜん

下には「先より修習せるをば除く」等云々。これは、爾前

にじようさぶつな

み

もん

に二乗作仏無しと見えたる文なり。

と けんろじようきよう にじようさぶつ ゆる けんろふじようきよう

問う。 顕露定教には二乗作仏を許すや。 顕露不定教には

ゆる ひみつ ゆる にぜん えん

これを許すか。 秘密にはこれを許すか。 爾前の円には

にじようさぶつ ゆる べつきよう ゆる

二乗作仏を許すや。 別教にはこれを許すか。

こた せん じゆうじゆう もんどうあ みな

答う。 詮ずるところは、 重々の問答有りといえども、 皆

ゆる せん にじようかい さぶつ ゆる

これを許さざるなり。 詮ずるところは、 二乗界の作仏を許さ

ぼさつかい さぶつ ゆる しゆじようむへんせいがんばど ねがい

ずんば、 菩薩界の作仏も許さざるか。 衆生無辺誓願度の願

か ゆえ しゃく ぼさつ とくどう み きようもん

の闕くるが故なり。 釈は、 菩薩の得道と見えたる経文を

しょう せん け ほう はんいや えん ぼさつ

消するばかりなり。 詮ずるところ、 華・方・般若の円の菩薩

しよじゆう のぼ ほんぷ にじよう もちろん いっさいしゆじよう

も初住に登らず。 また凡夫・二乗は勿論なり。 「一切衆生

を化して、皆仏道に入らしむ」の文の下にて、このことは意

得べきなり。

問う。円の菩薩に向かつては二乗作仏を説くか。

答う。説かざるなり。「いまだかつて人に向かつて、かく

のごとき事を説かず」の釈に明らかなり。

問う。華嚴経の「三つは差別無し」の文は十界互具の正し

き証なりや。

答う。次下の経二十五に云わく、「如来の智慧の大薬王樹

は、ただ二所のみを除く。生長することを得ざればなり。

しょうもん えんがく

とううんぬん

にじようさぶつ

ゆる

いわゆる、声聞と縁覚となり」等云々。二乗作仏を許さず

ふんみよう

ほんもん

じっかいごぐ

み

ということ分明なり。もししからば、本文は十界互具と見

じつ

にじようさぶつな

じっかいごぐ

ゆる

えたれども、実には二乗作仏無ければ、十界互具を許さざ

うえ

にぜん

きよう

ほけきよう

さだ

すで

るか。その上、爾前の経は法華経をもつて定むべし。既に

さき

しゆじゆう

のぞ

とううんぬん

い

けごん

ぼさつ

「先より修習せるをば除く」等云々と云う。華嚴は菩薩に

む

にじようさぶつな

い

ふんみよう

ほうどう

ほんにや

向かつて二乗作仏無しと云えること分明なり。方等・般若

もまたもつてかくのごとし。

そう

にぜん

えん

こころう

ようふた

あ

いち

あなん

総じて、爾前の円に意得べき様二つ有り。一には、阿難

けつじゆう

いぜん

ほとけ

いっとな

かなら

べつ

えんにきよう

ぎ

ふく

結集の已前、仏は一音に必ず別・円二教の義を含ませ、

いちいち こえ かなら しきよう さんきよう ふく
一々の音に必ず四教・三教を含ませたまえるなり。故に、
じゆんえん えん にぜんきよう な ゆえ えん いま

純円の円は爾前経には無きなり。故に、円といえども、今
ほけきよう たい べつ おき い せん じゆう

の法華経に対すれば別に撰むと云うなり。籤の十に「また
いちいち くらい みなふげん ぎようふ にもんあ ゆえ し か

一々の位に皆普賢・行布の二門有り。故に知んぬ、兼ねて
えんもん もち べつ おき しやく

円門を用いるも別に撰むることを」と釈するなり。この意
に ぜん とくどうな い に あなんけつじゆう ととき

にて爾前に得道無しと云うなり。二には、阿難結集の時、
たらよう しる いちだん じゆんべつ いちだん じゆんえん か

多羅葉に注し、一段は純別、一段は純円に書けるなり。
ほうどう はんにか

方等・般若もかくのごとし。この時は、爾前の純円に書け
ところ ほつけ に じゆう なか おお えんゆう そう あ

る処はほぼ法華に似たり。「住の中には多く円融の相を明

とう しやく

こころ

てんだいちしやだいし

かす」等と釈するは、この意なり。天台智者大師はこの

どうり えたま

ゆえ

たし

けごん

そう

にぜん

きよう

道理を得給いし故に、他師の華嚴など総じて爾前の経を

こころえ

違

たま

心得しにはたがい給えるなり。

ふた

ほうもん

てんだいだいし

こころえたま

この二つの法門をばいかにとして天台大師は心得給いし

探

ほけきよう

しんげほんとう

いちいち

もんじ

ぞとさぐれば、法華経の信解品等をもつて、一々の文字は

べつ えん

ぼさつ

しきよう

さんきよう

こころえたま

別・円の菩薩および四教・三教なりけりとは心得給いしな

ちえ

う

のち

かれ

きよう

む

み

とき

り。またこの智慧を得るの後、彼らの経に向かつて見る時

いつこう

べつ

いつこう

えんとう

み

ところ

あなんけつじゆう

は、一向に別、一向に円等と見えたる処あり。阿難結集の

のち 仕業

みたま

後のしわざなりけりと見給えるなり。

てんだいいつしゅう がくしや なか どおり え にぜん えん

天台一宗の学者の中にこの道理を得ざるは、爾前の円と

ほっけ えん しじゅうおな ぎ おも ゆえ いっしよ えんぎよう

法華の円と始終同じき義と思うが故に、一処のみの円教の

きよう み いつかんにかんと じゆんえん ぎ そん ゆえ か きようとう

経を見て一卷二卷等に純円の義を存する故に、彼の経等

じようぶつ おうじよう ぎり ゆる ひとびと おほ

において成仏・往生の義理を許す人々これ多きなり。

けごん ほうどう ほんにや かんぎようとう ほんもん あなん えんぎよう

華嚴・方等・般若・觀経等の本文において、阿難、円教の

まき か ひ そくしんじようぶつ うんぬん そくとくおうじよう とう

巻を書く日に、「即身成仏」云々、「即得往生」等とある

み いっしよないしじゆんじしよ おうじよう じようぶつ と おも

を見て、一生乃至順次生に往生・成仏を遂げんと思ひ

たり。

あなんけつじゆういぜん ぶっく い せつきよう こころ

阿難結集已前の仏口より出だすところの説教にて意

を案あんずれば、「即身成仏」「即得往生」の裏うらに歴劫修行りやつぎょうしゆぎょう・
永不往生ようふおうじようの心こころを含ふくめり。句くの三さんに云いわく、撰論しやうろんを引ひいて云
わく「了義經りやうぎぎやうは文もんに依よつて義ぎを判はんず」等とうという意いなり。爾
前ぜんの經きやうを文もんのごとく判はんぜば仏意ぶつゐに乖そむくべしというこころことは、
これなり。記きの三さんに云いわく「法華ほつげより已前いぜんは不ふ了義りやうぎなるが故ゆえ
に」と云いえり。この心こころを釈しゃくせるなり。籤せんの十じゅうに云いわく「た
だこの法華ほつげのみ前教ぜんきやうの意いを説といて今經こんきやうの意いを顯あらわす」。
釈しゃくの意いはこれなり。

そもそも、他師たしと天台てんだいとの意いの殊ことなる様ようはいかん。他師たし

いちいち きょうぎよう む か きょうぎよう こころ え おも

は、一々の経々に向かつて彼の経々の意を得たりと謂

てんだいだいし ほけきよう ほとけしじゆうよねん きょうぎよう と たま

えり。天台大師は、法華経に仏四十余年の経々を説き給

こころ しょきよう しゃく ゆえ あなんそんじゃ か

える意をもつて諸経を釈する故に、阿難尊者の書きしと

しょきよう ほんもん 違 ぶつ い あいかな

ころの諸経の本文にたがいたるようなれども、仏意に相叶

かんぎよう しょ きょうせつ み

いたるなり。しばらく観経の疏のごとき、経説には見え

いちじ しょきよう しゃく ほんもん いっしょ べつきよう

ざれども、一字において四教を釈す。本文は、一処は別教、

いっしょ えんぎよう いっしょ つうきよう に しゃく しきよう わた

一処は円教、一処は通教に似たり。釈の四教に亘るは、

ほつけ こころ ぶつ い し ゆえ あなんそんじゃ

法華の意をもつて仏意を知りたもうが故なり。阿難尊者の

けつじゆう きよう いっしょ じゆんべつ いっしょ じゆんえん か

結集する経にては、一処は純別、一処は純円に書き、

べつ えん いちじ ふく ぎ ほっけ か ほっけ に
別・円を一字に含する義をば法華にて書けり。法華にして爾
ぜん きょう こころ し
前の経の意を知らしむるなり。

もししからば、一代聖教は反覆すといえども、法華経無
いちだいしやうぎやう はんぷく
ほけきやうな

くんば一字も諸経の心を知るべからざるなり。また、
いちじ しよきやう こころ し

法華経を讀誦する行者も、この意を知らずんば法華経を
ほけきやう どくじゆ きやうじや こころ し
ほけきやう

讀むにてはあるべからず。爾前の経は、深経なればとい
よ にぜん きやう じんきやう

つて浅経の意をば顯さず、浅経なればといつてまた
せんきやう こころ あらわ せんきやう

深義を含まざるにもあらず。法華経の意は、一々の文字は
じんぎ ふく ほけきやう こころ いちいち もんじ

皆爾前経の意を顯し法華経の意をも顯す故に、一字を
みなにせんきやう こころ あらわ ほけきやう こころ あらわ ゆえ いちじ

よ いつさいきよう よ いちじ よ いつさいきよう よ

読むは一切経を読むなり、一字を読まざるは一切経を讀

ほけきような くに しよきようあ

まざるなり。もししからば、法華経無き国には、諸経有り

とくどう かた めつご いつさいきよう よ

といえども得道は難かるべし。滅後に一切経を読むべきの

よう けごんぎよう かなら ほけきよう つら か きよう こころ あらわ

様は、華嚴経にも必ず法華経を列ねて彼の経の意を顯

かんぎよう かなら ほけきよう つら こころ あらわ

し、觀経にも必ず法華経を列ねてその意を顯すべし。

しよきよう がっし すえ

諸経もまたもつてかくのごとし。しかるに、月支の末の

ろんじ しんたん にんし こころ わきま いつきよう こころ

論師および震旦の人師、この意を弁えず。一経を講じて

おのおのわれえ おも しよきよう ちようか おも な

各 我得たりと謂い、また諸経に超過するの謂いを成せる

いつきよう こころ え

は、かつて一経の意を得ざるのみにあらず、謗法の罪に墮

ほうぼう つみ お

つるか。

と てんじく ろんじ しんたん にんし なか てんだい あなん

問う。天竺の論師、震旦の人師の中に、天台のごとく阿難

けつじゆういぜん ぶつく しよきよう こころえ ろんじ

結集已前の仏口の諸経をかくのごとく意得たる論師・

にんし あ

人師これ有るか。

こた むじやくぼさつ しようろん しいしゆ しよきよう しゃく

答う。無著菩薩の撰論には四意趣をもつて諸経を釈し、

りゆうじゆぼさつ だいろん ししつだん いちだい え

竜樹菩薩の大論には四悉檀をもつて一代を得たり。これら

こころ しゃく み てんだい

はほぼこの意を釈すとは見えたとれども、天台のごとく

ふんみよう み てんじんぼさつ ほつけろん

分明には見えず。天親菩薩の法華論も、またもつてかくの

しんたんこく てんだい いぜん ごひやくねん あいだ

ごとし。震旦国においては、天台より以前の五百年の間に

は一向いっこうにこの義ぎ無し。玄げんの三さんに云いわく「天竺てんじくの大論だいろんすら、

なおその類たぐいにあらず」云々うんぬん。

籤せんの三さんに云いわく「一家いっけの章疏しょうしよは理りに附ふし教きように憑よる。お

よそ立たつるところの義ぎは、他ほかの人ひと、その弘ひろむるところに随したが

つてひとえに己おのが典てんを讚ほむるに同おなじからず。もし法華ほっけを弘ひろ

むるも、ひとえに讚ほむることなとがお失とがなり。いわんやまた余よを

や」文もん。「何なにとなれば、既すでに開権かいこん顕実けんじつと言いえば、何なんぞ一向いっこうに

権ごんを毀そしるべけんや」。

華嚴經けごんぎようの「心こころ、仏ほとけおよび衆生しゆじよう、この三みつつは差別さべつ無し」

の文は、華嚴のもん人師けごんこの文にんしにおいて一心・覚もん・不覚いっしんの三義かくをふかく立さんぎつるは、源みなもと、起信論きしんろんの名目みようもくを借かりてこの文もんを積しゃくする

なり。なんがくだいし南岳大師みようほうは妙法にじの二字しゃくを積もんするに、この文かを借もんり

て三法妙さんぼうみようの義ぎを存そんせり。天台智者てんだいちしやだいし大師えゆうはこれえゆうを依用えゆうす。こ

こにおいて天台宗てんだいしゆうの人ひとは華嚴けごんと法華ほつけと同等どうとうの義ぎを存そんする

か。また澄観ちようかんは「心こころ、仏ほとけおよび衆生しゆじよう」の文もんにおいて一心いっしん・

覚かく・不覚ふかくの義ぎを存そんするのみにあらず、性悪しやうあくの義ぎを存そんして云い

わく、澄観ちようかんの釈しゃくに「彼の宗かにはこれしゆうを謂いつて実じつとなす。

この宗しゆうの立義りゆうぎ、理りとして通ぜざるつうことなし」等とう云々うんぬん。これ

この宗しゆうの立義りゆうぎ、理りとして通ぜざるつうことなし」等とう云々うんぬん。これ

ほうもんゆる

いな

らの法門許すべきや不や。

こた

い

ぐ いち

い

こんけ

もろもろ

えんもん

答えて云わく、弘の一に云わく「もし今家の諸の円文の

こころな

か

きよう

げ

むね

り

じつ

しよう

がた

意無くんば、彼の経の偈の旨、理として実に消し難から

おな

ご

い

いま

もん

げ

こころ

ん」。同じく五に云わく「今の文を解せずんば、いかんぞ『心

いっさい

つく

みつ

さべつな

しようげ

もん

き

しち

は一切を造る。三つは差別無し』を消解せん」文。記の七に

い

しようあく

な

き

云わく「いるかせにしてすべていまだ性悪の名を聞かず」

い

もん

てんだい

こころ

え

と云えり。これらの文のごとくんば、天台の意を得ずんば

か

きよう

げ

いし

がた

しんたん

にんし

なか

てんだい

彼の経の偈の意知り難きか。また震旦の人師の中には天台

ほか

しようあく

みようもく

ほけきよう

の外には性悪の名目あらざりけるか。また法華経にあら

いちねんさんぜん ほうもんだん

ずんば一念三千の法門談ずべからざるか。天台已後の華嚴

まっし

しんごんしゅう

ひと

しょうあく

じしゅう

えきよう

の末師ならびに真言宗の人、性悪をもつて自宗の依経の

せん

てんじく

つた

そし

つた

詮となすは、天竺より伝わりたりけるか、祖師より伝わる

てんだい

みようもく

ぬす

じしゅう

ないしろう

い

か、また天台の名目を偷んで自宗の内証となすと云える

よよ

かんが

か。能く能くこれを験うべし。

と

しょうあく

みようもく

てんだいいつけ

かぎ

しよしゅう

問う。性悪の名目は天台一家に限るべし。諸宗にはこ

な

しょうあく

た

くかい

いんが

れ無し。もし性悪を立てずんば、九界の因果をいかんが

ぶっかい

うえ

げん

仏界の上に現ぜん。

こた

ぎらい

い

しょうあく

だん

とううんぬん

答う。義例に云わく「性悪、もし断ぜば」等云々。

と えんどんしかん しょうこ いちねんさんぜん しょうこ けごんきよう ころ

問う。円頓止観の証拠と一念三千の証拠に、華嚴経の「心、

ほとけ しゆじよう みつ さべつな もん ひ か

仏および衆生、この三つは差別無し」の文を引くは、彼の

きよう えんどんしかん いちねんさんぜん と

経に円頓止観および一念三千を説くというか。

こた い てんだいしゆう ひと なか にぜん えん ほっけ

答えて云わく、天台宗の人の中には、爾前の円と法華の

えん どう ぎ そん

円と同の義を存す。

と ろくじつかん なか さき さんきよう もん ひ えん ぎ しゃく

問う。六十巻の中に、前の三教の文を引いて円の義を釈

もん か こころえ にぜん えん もん ひ ほっけ えん

せるは文を借ると心得、爾前の円の文を引いて法華の円の

ぎ しゃく か ぞん さんしゆ

義を釈するをば借らずと存ずるや。もししからば、三種の

しかん しょうもん にぜん しょきよう ひ なか えんどんしかん しょうこ

止観の証文に爾前の諸経を引く中に、円頓止観の証拠に

けごん ぼさつ しょうじ とう もん ひ みようらく

華嚴の「菩薩、生死において」等の文を引けるをば、妙楽

しやく い かえ きようみ か か みようえん あらわ

釈して云わく「還つて教味を借りて、もつて妙円を顕す」。

もん しょうよう えん もん か しやく

この文は諸経の円の文を借ると釈するにあらずや。もし

こころ ほとけ しゅじよう もん いちねんさんぜん しょうこ

しからば、「心、仏および衆生」の文を一念三千の証拠に

ひ か

引くことは、これを借れるにてあるべし。

こた どうせい てんだいしゆう けごんしゆう けん い

答う。当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざることを云う

けごんしゆう こころ ほつけ けごん どう しょう にぎ

か。華嚴宗の心は、法華と華嚴とにおいて同・勝の二義を

そん どう ほつけ けごん しょうせん ほうもん どう しょう

存す。同は、法華・華嚴の所詮の法門はこれ同とす。勝に

にぎ いにしえ けごんしゆう きようしゆ たいぼさつしゆとう しょう

は二義あり。古の華嚴宗は、教主と対菩薩衆等の勝の義

を談ず。近代の華嚴宗は、華嚴と法華とにおいて同・勝の

二義有りと云々。その勝においてまた二義ありという。

迹門は華嚴と同・勝の二義あり。華嚴の円と法華迹門の

相待妙の円とは同なり。彼の円も判麤、この円も判麤の故

なり。籤の二に云わく「故に、二妙を須つて、もつて三法を

妙ならしむ。故に、諸味の中に円融有りといえども、全く

二妙無し」。私志記に云わく「昔の八の中の円は、今の相待

の円と同じ」と云えり。これは同なり。記の四に云わく「法界

をもつてこれを論ずれば、華嚴にあらざるなし。仏慧をも

つてこれを論ずれば、法華にあらざるなし」云々。また云わ

く「応に知るべし、華嚴の尽未来際は即ちこれこの経の

常在靈山なり」云々。これらの釈は爾前の円と法華の

相待妙とを同ずる釈なり。

迹門の絶待開会は永く爾前の円と異なり。籤の十に云

わく「この法華経は、開権顕実・開迹顕本す。この両意は

永く余経に異なり」と云えり。記の四に云わく「もし仏慧を

もつて法華となさば、即ち」等云々。この釈は、仏慧を明

かすは爾前・法華に亘り、開会はただ法華に限ると見えた

り。これは勝なり。しよう 爾前の無得道なることは分明なり。にぜん むとくどう ふんみよう

その故は、二妙をもつて一法を妙ならしむるなり。既に爾ゆえ にみよう いっぽう みよう

前の円には絶待の一妙を闕く。衆生も妙の仏と成るべぜん えん ぜったい いちみよう か しゅじよう みよう ほとけ な

からず。故に、籤の三に云わく「妙変じて麤となる」等のゆえ せん さん い みようへん そ とう

釈これなり。華嚴の円変じて別と成るといふ意なり。しゃく けごん えんへん べつ な ところ

本門は、相待・絶待の二妙ともに爾前に分無し。また迹門ほんもん そうだい ぜっだい にみよう にぜん ぶん な しゃくもん

にもこれ無し。爾前・迹門は異なれども、二乗は見思を断な にぜん しゃくもん こと にじよう けんじ だん

じ菩薩は無明を断ずと申すことは、一往これを許して再往ぼさつ むみよう だん もう うちおう ゆる さいおう

はこれを許さず。本門寿量品の意は、爾前・迹門においゆる ほんもんじゆりようほん ところ にぜん しゃくもん

て一向に三乗ともに三惑を断ぜずと意得べきなり。

どうり わきま

てんだい がくしゃ

にぜん ほっけ

この道理を弁えざるのあいだ、天台の学者は、爾前・法華

の 一往同の 釈を見て永異の 釈を忘れ、 結句、 名は天台宗

にてその義分は華嚴宗に堕ちたり。 華嚴宗に堕つるが故に、

ぎぶん けごんしゅう

お

けごんしゅう

お

ゆえ

方等・般若の円に堕ちぬ。 結句は善導等の 釈の見を出でず。

結句、 後には謗法の法然に同じて、「師子身中の虫の自ら

師子を食むがごとし」文へ仁王経の下。 「大王よ。 我滅度

して後、 未来世の中の四部の弟子、 諸の 小国の王・太子・

王子乃ちこれ三宝を任持して護る者、 転たさらに三宝を滅

おうじすなわ

さんぼう

にんじ

まも

もの

うた

さんぼう

めつ

のち みらいせ なか しぶ でし もろもろ しょうこく おう たいし

もん にんのうきょう げ だいおう われめつど

けつく のち ほうぼう ほうねん どう し し しんちゅう むし みずか

ほうどう ほんにや えん お けつく ぜんどうとう しゃく けん い

いっこう さんじよう さんわく だん 二ころう

は し し しんちゆう むし みずか し し は
し破せんこと、師子身中の虫の自ら師子を食むがごとし。

げどう おお わ ぶつぼう やぶ だいざいか え うんぬん
外道にはあらず。多く我が仏法を壊り、大罪過を得ん」云々。

せん じゆう い はじ じゆうぜん とうじゆう いた
籤の十に云わく「始め住前より登住に至るこのかた、

まった えん ぎ だいにじゆう つぎ だいしちじゆう いた もんそう
全くこれ円の義なり。第二住より次の第七住に至る文相

しだい べつ ぎ に しちじゆう なか
次第して、また別の義に似たり。七住の中において、また

いったそうそくじざい わきまえ つぎ ぎよう こう じ しだい
一多相即自在を 弁ず。次の行・向・地、またこれ次第・

さべつ ぎ いちいち くらい みなふげん ぎようふ にもんあ
差別の義なり。また一々の位に皆普賢・行布の二門有り。

ゆえ し か えんもん もち べつ おさ
故に知んぬ、兼ねて円門を用いるも別に撰むることを」。